

ています。

戦後の八月二十九日、一時帰休、

九月一日、即時帰港命令を受け大村回航、

二十年十一月十九日、回航残務整理、解除復員。

二十一年四月、伊号第一五七号海没処分。

このようにして私も復員。潜水艦も処分させられ、私の戦争は一応終結をとげた。

ソロモン「せ号」作戦

必死の機動舟艇隊

北海道 高橋 義平

―高橋さんの略歴を見ますと、現役で海軍に徴集されていますが、昭和十五年十二月一日ですか、横

須賀海兵団入団の十六年一月十日ですか。

私は大正九年八月十五日、福島県で生まれました。

北海道から福島に集り、海軍の人に引率され、東京品川の旅館に一泊して海兵団に入団したのですが、昭和

十六年一月十日でした。

海兵団での基礎教育を終わって筑波海軍航空隊に入隊は四月十五日、そこで三等機関兵となりました。海兵団も航空隊も訓練は極めて厳しく、海軍魂も基礎技術もたたき込まれました。

―十七年二月に、第二号艦機装員付とありますが、それが戦艦「武蔵」だったのですか。

私は筑波海軍航空隊から、有馬事務所転属という命令を受け、何だか判らず指定されるまま長崎の波止場へ行きましたら、海軍の腕章をした人がいて、転属した私ともう一人はランチで対岸のバラックへ案内されました。

そこは長崎ドックなのです。二号艦とは戦艦「武蔵」なのです。「武蔵」の四囲は棕櫚の、網というかすだれのようなもので覆われ、外からは見えぬようになっていました。有馬事務所は、艦長有馬大佐の名をとった防諜名だったわけです。

「武蔵」の建造は極秘、機密秘というか、親兄弟にも絶対に話さぬ、万一漏洩すれば厳罰に処せられると

いうものでありました。しかし、作業の熔接の火は、棕櫚のすだれ幕からは時々漏れて見えるのです。私も下宿の人から、何を造っているのか、秘かに聞かれることもありましたが、さとられぬようにとぼけた返事をしていました。従って内部でも、二号艦に入るためには、顔写真入名札を着けていましたし、その名札が無ければ艦に入られない。また、艦内で図面は懐中電燈で見たりしていました。

二号艦は五月ごろのある朝、誰にも知らされず出帆、駆逐艦五、六隻に護衛され呉の第四ドックに入り、砲を搭載、瀬戸内海で公式運転の後引き渡されました。

「武蔵」は昭和十七年八月五日に竣工して、「大和」に代り連合艦隊の旗艦となり、山本司令長官がのられたのです。本来、連合艦隊旗艦は横須所屬の艦となっていたのですが、「武蔵」の竣工が「大和」より後になったので、竣工と同時に旗艦になったわけです。

私は「武蔵」引渡しを終り退艦、正式竣工前の七月二十三日、海軍工機学校へ内火術（内燃機）練習生

として入校し、十月二十日卒業、同日付で海軍水雷学校付となり、十一月一日上等機兵となり、二カ年間で漸く一人前の機関兵になったわけです。この間、教育・訓練は言葉にあらわせない厳しいものだが、私はソロモン海戦の「せ号作戦」についてお話をしたいと思います。

「せ号作戦」というと、昭和十八年十月のソロモン、コロンバガラ島の撤退部隊の輸送揚陸作戦のことですが、数十トンの大発での戦闘は大変なものだったでしょう。

私は十八年一月十九日、横須賀鎮守府第七特別陸戦隊付舟艇隊員となり、「桐川丸」に便乗し、ソロモン群島方面の作戦に従軍したわけです。

特に九月十六日から十月十四日まで、種子島部隊に属して「せ号作戦」に参加し、機動舟艇部隊（陸海）指揮官から、次の表彰状を授与されました。これは、海軍省野紙に写しが貼ってあり、私の携帯履歴書にも記入されています。

表 彰 状

昭和十八年九月十六日以降十月十四日迄「セ」号作戦中本職ノ指導下ニ在リテ機動舟艇部隊トシテ遠ク「スピン」ニ進出シ熾烈ナル被爆、砲煙彈雨ノ中ニ「コロンバンガラ島」ニ対シ決死的輸送作戦ヲ取行撤収部隊ヲ駆逐艦ニ搭載及「スピン」ニ揚陸スルコトニ回ニ及ビ其ノ間飛行機、巡洋艦、駆逐艦及魚雷艇ノ執拗ナル妨害ヲ受ケツツ韌強無比ナル奮戦ヲ続ケ決死敢闘克ク難局ヲ突破シテ「コロンバンガラ島」北岸集結部隊ノ転進ノ完フシ 本作成ニ貢献セシ所極メテ大ニシテ其ノ武功拔群ナリ
依テ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十八年十月十四日

機動舟艇部隊指揮官

陸軍少将正五位勲三等 功四級

芳村 正義

私の海軍経歴約五年間中、苦しかったこと、懐かしかったことの連続でしたが、そのなかで現在でも強烈に脳裏に焼きついて、忘れることの出来ないことは、表彰状にあるように、横鎮第七特別陸戦隊舟艇隊としてのソロモン戦従軍のことであります。

—その状況を具体的にお話し下さい。当時は既に制空・海権がわが軍から米軍・連合軍側にあり、両軍の力の均衡が破れてきた時で、撤収・撤退の悲惨な戦の連続でしたでしょう。

はじめに申したように、昭和十八年二月、輸送船「桐丸」に便乗、ラバウルの松島（日本名を付けていた）に上陸、その後ラバウル出航の輸送船に曳航されて我が六号艇の大発はソロモンに向かったのです。この輸送船は陸軍部隊を満載（部隊名不詳）していました。

翌早朝、天候は快晴、左舷遙かにブーゲンビル島を望む所まで来ていました。すると、間もなく右舷彼方に小型機の編隊、約三十機ぐらいが認められた。当時、私たちは、ブーゲンビル海域の制空・海権はともにわが軍にありと聞かされていたので、当然反転攻撃をかけ

てきました。よく見ると星のマークのアメリカ機です。

前方の輸送船の見張員もようやく気がついた様子で、対空兵器で十発ぐらい撃ったと思った瞬間、一番機の爆弾が輸送船の船橋附近を直撃、アツという間に沈没し、同時にわが六号艇を曳航していた曳航索が切断されてしまいました。敵機は輸送船の沈没を見届けると同時に、わが六号艇を繰り返して機銃掃射、艇はたちまち穴だらけとなり沈没です。しかし、幸いにも我々六名の艇員には負傷者もなく海に飛び込み、附近にある浮遊物を集めて掴まり、極力体力の消耗を防ぐように努力しました。

暫くして、ブイン（ブーゲンビル南岸の港）基地から発進したと思われる零戦一機が超低空で飛来し、頭上を旋回してさかんに翼を振ってゆきました。私共の回りには陸軍兵士の負傷者が救命胴衣にぶらさがるようにして、無数に浮いておりました。

かなりの時間が経過して海軍の駆潜艇が救助に現れて、先づ陸軍兵士から救助し、我々六名は一番最後に救助されました。思えば何時間泳いだことか、我々が

救助された時は陽も大分西に傾きかけたころだったと記憶しています。

救助はされたけれど、我々は疲労困憊、甲板上で立つことが出来ず、数時間は横になったままでした。

このようにして大事な六号艇と身の廻りの品物を一切失い、裸同然でブーゲンビル島のブインに上陸、基地から替りの大発と被服類を受領し、夜間のみ航行でニュージョージア島の西端のムンダに上陸、ここで数日間輸送作戦に従事した後に、コロンバンガラ島（ニュージョージア島の西方西）の横須賀第七特別陸戦隊舟艇基地に進出したのです。

―「せ号作戦」参加ということでしようが、舟艇は何隻ぐらいで、大発というところのぐらいの人員が搭載できるのですか。

舟艇は一―八号までであったと思いますが、六号艇は先程申したとおり、ラバウル經由松島停泊で、我々はその間幕舎生活をして待機していたのです。大発は、上陸用や撤退輸送用の舟（焼玉エンジン）で、武装兵士百名ぐらいは乗船できた。定員は艇長以下六名ぐら

いで、私は機関長(工機学校出の者)でした。「せ号作戦」
参加は我々の艇だけだったように記憶しています。

ー コロンバンガラ島の舟艇基地進出後も「せ号作戦」
ソロモン海空戦は続けられていたのでしようが、
その状況を詳しくお話下さい。

基地に進出してから後、数ヵ月間にわたって、執拗
な敵魚雷艇および飛行機の攻撃を受けつつ、ソロモン
群島の各島に散在する友軍基地に対し、夜間だけ航行
して輸送作戦に従事したのです。

九月二十一日夜半、ニュージョージア島とコロンバ
ンガラ島の間、細い島、アルンデル島の北端に追い
つめられて、悪戦苦闘中の歩兵第十三連隊(第六師団
の熊本編成連隊) 将兵のコロンバンガラ島への撤収作
戦の命令を受けました。文字通り砲煙彈雨の中、無事
撤収に成功したのです。

当時コロンバンガラ島には、陸海軍部隊や設営隊等
が二万人ぐらい集っていたのではないでしょうが、こ
のままではガダルカナル島の二の舞になるというの
で、撤退をするということとなり、ソロモンの大発給

動員で夜間撤退を命ぜられたのです。それは陸海共同
の「せ号作戦」と称されたものでしょう。

その時すでに、コロンバンガラは敵の包囲下にあり、
退路は断たれて孤立していました。それで舟艇機動に
よる撤退作戦が発動されたのです。当時、私はアミー
バー赤痢で一日数十回の下痢と、熱帯熱マラリアによ
る毎日四十度をこえる発熱で、食欲皆無、飲む薬もな
く、重病人の状態でほとんど気力だけで作戦に従事し
ていました。当時まだ二十三歳の若さの故だろうか、
今考えてみても、よくぞ根性で生き抜いたものと思
議に思えます。

ー 先程の陸軍少将の感謝状ですが、高橋さんは海軍
陸戦隊舟艇隊だったのですが、陸海共同作戦だつ
たからですか。

「せ号作戦」は私もこの点、合点いかないのですが、
今いわれた共同作戦の最高指揮官が陸軍の芳村少将だ
ったことでしょうし、また、よく考えてみると、「せ
号作戦」の最終上陸地点ブーゲンビル島のブインまで
輸送した部隊は確か、陸軍の歩兵第十三連隊の生き残

りの将兵だったように記憶している。

聞くところによると、この撤退作戦は事前に米軍に探知され、そのため猛烈な攻撃と妨害を受けつつも敢行されたものである。数日間、昼は島陰にかくれ、夜になると動き出し、島伝いに敵の包囲網を突破してようやくの思いで、プインの港に接岸、陸軍兵は喜び勇んで上陸していった記憶は鮮明です。

しかし、私は極度の衰弱と、無事に任務を果たした安堵感のためか、半ば昏睡状態となり、直ちに担架で野戦病院に運ばれました。数日後、ラバウル第八海軍病院経由で、病院船「天應丸」で内地環送され、大湊海軍病院に約五ヵ月入院しました。昭和十九年四月二十八日に全治退院して新任務につきました。

―九死に一生というところですが、その後の任務と
いうと、どういう勤務でしたか。

十九年五月、三等機関兵曹に任官して、第三十五号海防艇に乗組を命ぜられたのです。この海防艦は三等駆逐艦とでもいいましょうか、昭和十九年に建造されたものでした。それで門司―呉―キールン―門司―横

須賀と、船舶護衛でしたが、一時は駆逐艦「楓」にも乗り台湾のキールンで暫く滞在したこともありまして。

その後二十年四月には、船艇磁気掃海隊に転属しましたが、これは新設部隊で、B 29が日本近海、港湾に落した磁気機雷の掃海任務だったのです。ご承知のように、浮遊の機雷は海面にあるので外から判るが、磁気機雷は水底に沈んでいて、磁気により、鉄船が通ると爆破するという始末の悪いものでした。

そこで磁気機雷掃海の新設部隊が編成されたのです。小名浜や真鶴等の漁港で、油が無く引き上げられている木造漁船をさがして徴用するのが第一の仕事でした。そして長いワイヤーロープの先に磁石を着け、磁気機雷を爆発させるといふ方法なのです。こちらは木造船ですから機雷の上を通っても磁石は反応しない、という理屈です。

このような作業が本格化されようとしている時に終戦となり復員、帰郷したのです。思えば、世界最大・最強の戦艦「武蔵」の竣工にかかわり、ソロモン海戦

では、僅か数十トンの舟艇によって、コロンバンガラ島、揚陸の文字通りの決死的作戦に死をまぬかれ、最後は、十数トンの木造漁船による磁気機雷の掃海任務。まさに六万九千トンの戦艦「武蔵」の勤務を思うと、感無量でした。いずれにしても、海軍々人としての根性と責務には何等変りはない、との誇りは今も持ち続けております。

コロンバンガラの砲戦

第六特別陸戦隊

広島県 吉岡光男

―大竹海兵団入団とのことですが志願をしたのですか。

私は徴兵で陸軍を志望したのですが、海軍の呉徴集、昭和十六年兵なのです。大正十年二月十七日、広島県の神辺町、旧竹専村で生まれました。徴兵検査では第一乙種で、十七年一月十日大竹海兵団入団です。家に

は慶応元年生まれの祖母、明治二十七年生まれの父と母、昭和六年生まれの弟と、小さい妹で、何とか留守はやっていけると思っていました。

海兵団に三ヵ月、四月十五日佐伯航空隊へ入隊ですが、当時は水兵で海兵団と変わらない、基礎訓練という教育を受けたのです。その後七月には呉海兵団で機関科となり自動車運転訓練を十一月まで受けたのです。

―海軍の訓練は陸軍とも違っていたようですが、吉岡さんの時はどうでしたか。

海軍の訓練は特に厳しかった。パッタという檣の棒、一メートル位の太い木刀というか鉄の柄のようなもので「軍人精神直入棒」と墨で書かれた棒で尻を叩く、というより殴るのです。殴られぬ日もあったが、大体平均的に殴られる日が多かった。他の班で音がすると「うちもやるか」と古兵がいつて始める。これは個人のミスばかりでなく、班で一人でもあれば団体の共同責任で制裁をされるわけです。

呉鎮で教育を受けてから十七年十一月呉の第六特別